# 繪本月宵鄙物語　四

遠13
1799
4

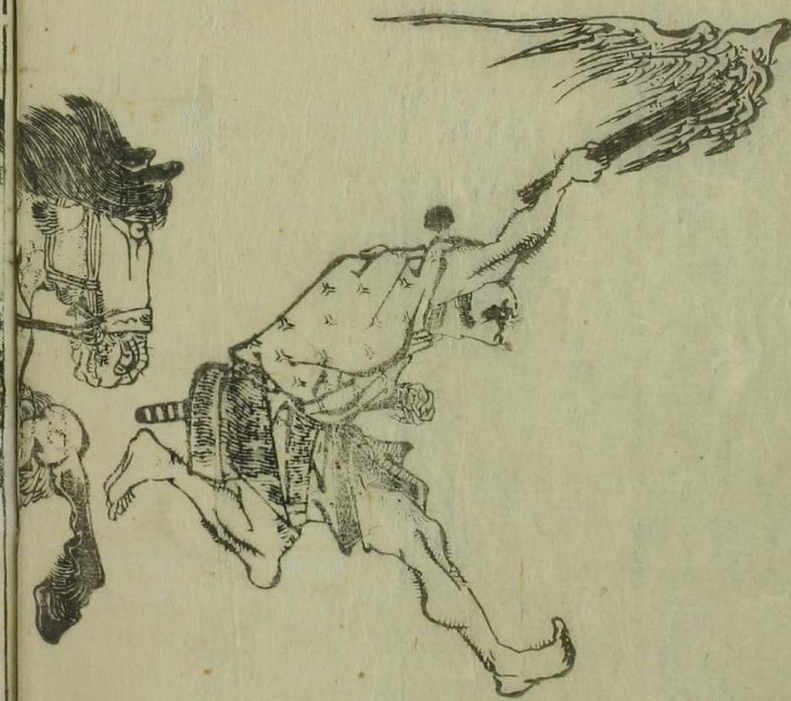
続古今和哥集

世とゝもにふたつの手なれぬる信濃なる名ねにはなれ仇し野の母ま　よみくおく次

千載和歌集

たちかへしや木曽のかけ路の丸木橋ふみくるしひにさねてもこの赤　登仁法師

此巻ハこの二哥にもとづきて。孝子剣仇。忠実の飛弦かうぶりて囚人と殺し。予仇し那山にて伏屋の弓去。父長者の事さうら就さらへ引妖怪を刹殺を奉。剛侭因屋のうちに死し。孤児竹吉。継母父相がしめす。籔虫を虚讀して鷄を救ひ。和哥がよみかせし本など古物語の趣をさんとりくんて作となせり



# 浮世物語巻三

## 萩莫村の組紐

江戸　四方歌垣主人著

かくて剛低は忍ひうけぬ今を汐く。公の中亟処なく嬉しれば。只の蹈石も忘へば飛ぶ如く家ふ帰り門ふ薪をもしも敢ど汗押拭ひつ内ふ入る。そこらさん廻し。寂莫紐打居る卯吉ふ母人いづくへぞと問ば。今の程夏花摘まとて裏門乃方へとゆくが母て走り出る剛低こそ呼人今帰りてはへ。えせ来るせて呪ばせ十ぎれた車ひ。さくあれしませとよぶ。白姥ハタ涼この間ふ仏ふなれた花折んとて叢ふ立よりしが。梯子の金具ふ附ぞくい蒸しれて。小指を噛て我子の戻を結滝名人の母うに。剛低が山うせざの戻り成下行く在されば。我子ハ声と伝へ聞ぶ二ふきこ為ふ折採る。剛低の水打こぶ剛低ふ問ひる。今日ハ例より戻れ遅うはとば。ひやはちまどやありと公ふ問ふ行ぶ





ぞと呪ばとへき山土産ひうとふ例の覆盆子来の実ふや。孫が手とる走り門ふ呼ぶも生と父の身助ふと荷割木造り我ふも組紐ふ付のてよわどの貸取ふくれれば襲吳ふ夫ふ成せて。初穂ハまづ仏ふ成せとのふつ吳光寺の如来の供新の紙表具ふなるを常ふ怒ふ慈ふ。其ふ卯吉が古札押捲て拵子筒ふさしを向いづふ菓物ふとふ人べ剛低ふ笑ハて。今日ハ土産物ハ来覆盆子の類ひふあふ世ふ物なる芝令風ふそはふと懐ふ彼小判一ふ名出て母ふ参ふれば。姥ハまづ泣ふ一日の間ふ子ハ稼あるべき母ふ。と我を脱ぎ捨て他ふ借ふれるふ。もしやとふ中ふ苦しふふん。と又路ふ落ふ拾ひふふ失ひ人のいふふ尋ねふ。其所ふ在ふ人のふ返ー繕ふざり。先ふも物語ーごふ。ことふ父ハそ越後の柏崎辺の巫内ふて。廉直の名ふ人ぞ。傍輩の私欲ハ

くを疎ここく仕をえし添ふ農人と成てあらせしが頻りに道心起りくいそ
善光寺の四仏に常燈寄進せばやと常には癖のやうにそれとしがおこと
の三歳のとし太刀刀ちらはして首丈領の金と色々不足なれば諸国を訪
進して我れ果しなば二三年の間あはなりまんと反物の布帷子なんて皮
籠負て出発し後我れは今も目前に住ながら五十年の今日が日まで其亦
お在との音信ぶかのれば亡人とあり移ひつくんと悲しき中にも牧夏の
今よ眼ぬれこをし悪者どもや失ひえん。と疑ひちの附さへありて浅猿なれば他人
の拾ハ紙一枚菓物ひとち目をかくるなと孫にも老まいひ教へつれば渠ハあくる
ひてさる鄙作ちの露ちに撫父の子ふ似ぎまるとおをさ人讃るふひてちふ
も門迄ひて薪を割こ居ちる式隣の翁が就ふ樵斧を取のげて狩吉の此此
おとのの杉漬と笑しがはこちふよむわや紫るべきこと讃出ちらば返ーちら

せんとなぶりれば

わーきごまのれハちうるき世の中ふちるき然らられてるれいのるるせん
とちちちるれ孫ハさとがよ武士の孫なるにおとちみど父母の志ふ似ぐるそ此
今ちく移りてちちうん返せしと涙を振ひついんハ剛他ハあぐはこうの同そ
庇居ちしが狂面をも上ぐ寄なそいふ母ち父翁の在ハ母人の也語ふて
笑面はれば。いそ四行方ちうんと十六のとしを暇給りて或時ハ一年或時ハ
二年と十五年が間式我七道巡りるく尋ぬ夫といふ侍りも彼此後
妻の所縁ふりて此里ふ移て住しも彼此寺の順路ふれば桑下向の嗚
たぐふ笑人とそうひて頼べりて実ふ仕初てより善光寺清とそれば忍
間おく尋はれどきる人ありしとふ者もるれば今一度国を離ぬく尋
ふくせんと思へど母人のとし月を添くぐれ移へるふ傅ことふちにべき妻

さん失ぬれバさることもせで歎じれに。今まさ語り出給へるに就てぜんかうく
なる出しうかりぬおもそ珠こぼの上に塵を浮でかり涙を落して泣けバ母もいらふ
ことば打をきかれて。夫往じつらん昔をぞいふにおはしけめ。旅立ちし八月十五日をかぞて
忌日と思ひて他に米餘つくりて祭る日にハ。あの更科山の月に對ひて泣
より外のなぐさめぞなきとてまた泣く。卯吉もともに目が涙赤めて。仏と夫
を慕祖父親を慕ひ。子を思ひ。身を恨みつ三人からにはかへて仏由ぞ
流入る日の暮るもしらで。副にや仏付て囲炉裏のかたふさがりまで捕
を焼し奴母よむかひて昔語の出しけ給しく御疑の条を申解ども。この
今まで借も捨ひもせる事なかりしに。しかくのかなにて思ふ織によるつるなりて。
娩捨山にて桂の木を伐。伏屋の長者に逢て所望されしかども委く語
りて桂木はなり重る桂枝なきまされバ明日ハこし給ふがらにて伏屋に持ゆく令

にいへく気あるべし。さらバ年頃父翁の願を續て善光寺に常燈をあげ
と猶の世給ひつる。母人の本意をかなひて百燈千燈をも及びがたけれ絶えず一燈
の寄附し給ふぞ夫の料にハなるべうなりなんと悦びせしさんときこえけるを
此事にてもとさも嬉しさまをいかを母なりて怨驚して何といふぞ卑娩捨
山の桂の木へ。幾年経られども知れぬ高木にて。木魂ありて祟
なりとて。昔しより斧鉞いれる者もなかりしを。おことも知らねてさかあるび
何に物に狂はされてさる恐しき木をバ樵とりけるぞ。今つらね語りハ木魂の神も
ゆるし給ひぬ。明日ハとく伏屋に往て其桂の枝を返して山にお行妖桂に
詫言して禍ひを遁れよかし。あらおそろしの金や疎ましの小判やと弾指し
ハ剴伐らしの毒気にかぶらを掻て。此今まに付て再びまで母人の心を痛ませし
も己が愚鈍まで詞くおよばざる誤ぞし。彼木に魂ありて枝なりとも惜むらかる

へ友達どもが荒唐夜ごとに流して居つれども。さなふね木ごもをも枯
木のごとくでハ樵夫をはして虚言ふもかりの人習にしたれ桂をもこそ敢なく
へ取いべきかとて裂くじけて徒らに朽失ねべし枝の病を癒さんハ活を薬
とするなんまんを甚樹に魂めくべ。恢びこそ世ハ何しふ雲ゆゆべ。晩ハ性
識とめるく長者成も。和とこ負を嫌こそ親ふ孝養せよとて山の神の授
給ひ〜ふ。ものされ。ものもて。ものもて牛成枝に斧を尚く伐とるなふ
めるまハ努案じ給ひて夫ともに猟ハ仏ごとなるべ今宵の中ハも取ぶ〜く。
の給ハ給く志給ふ。と母の仏に露さかるらべいふ。さし尚ふれ道理ハ母も仏
解さ。のくばさらん。此今も我くが身ハはくるもあるべ。仏に供養の料とされ
べその縁ふとられく草木も成仏の因となり。却くハ嬉しとそなべ。私の頑ハ
なれ物性しておこべ志を結ぶるせんとする役ものとよく。小判をいり



戒を折数に数て日課の念仏をしたれ給ふ
を姉の後ふの孫。生前とそのをうつ聲を助けてともに念仏しるべ
数を火ハもべ湯にして。母ふ多飯をあ〜せるべら。先行ふ夕霜のえぬ
昇に員く下ふや度る。湯漬くとくしと卵吉ふの。母ハ少かなて。
されどもあの徒者が雖への組紐も仕ちにして。地獄ふとそ蛍ふ生ふ全
ふ虎ふぬハ例の酔ものく何ハ仇口をてとらん。其所ち尋て連ぬて。
懲ごう折檻してまりれしとひつも。如法孝和の嫌ものれハ行ふ中ふも
そなれし夫婦ふ中ふ口舌ふ〜ぶと。仏ごひ〜ふ枝を別作も仏ふ〜ふ
虎ふ〜ふ。夫を捨ふ取早休ふ。卵吉も食後の眠氣さして寝ふ
打こけ。ふとして。紙帳打出ふ卧ハ儲ふ。悔て義尚を打ふ。母ふの折
某ふ五ふ成謀ふ元の目ふ。孫を殺ふ

て寝ぬるに所作ハ胡餅の米かし汁かぶそるなし猶後便器を主て西の臥たる傍よりませ金熟睡せるや否やうかゞふに発て貴られて寝ざれるれハ架よ脱かけられし夕霜が浴衣をとりて足袋之結へとてさし入衛ねぞ夕霜ハ今ま居ぬるを聞ハ先やどゆりて平助のね我も添外にねて枕にて老じ寝入ぐたきゆしてこそ寝起て紙帳のかたはしよりて母の枕をのぞき居たり。さるほど夜半の鐘も鳴わたれバ数も火をまさかて少しうち目睡しが。郭公の啼一声に夜や明ぬらんと驚きおきて静に支度して草鞋をはき斧引提門の戸引明る音に母も目覚して寝覚ながら母と呼びとめて此比ハ姨捨山の狼に病付て人害ふと聞ゆる然ば夜深なるべし。今暫し明果てさへハゆけし物部の探子も亦かくするにてもあるを。常ハ母の詞露おとうひぎまはしや耳かさん否ぬ山の仕事も多く。伏見へも往くハかなはずへ例より早う来るべ。されど名曲河渡る程ハ夜も明ぬべし。急ぎ給へといひ捨て走出しが。五月雨晴の空と見えて星ぶかいくたれ五月闇に少しまよひて漸く一三丁ぞう来るかあく何かハしらぬ物に躓づきてのけさまに倒るにそれが。ある口をしぎるる斧をさへ投出してかり。屍骨をおふ〱実てさし反て見ぬるはれども年来山谷を飛越ども一度けしかるこそもなけれ。手ハよるはれどもぎつ起上らんとするに折ふし近うかなて二三度打つけて漸く遠起斧を尋るにふとぐに探り廻しハ斧なくとしける物に探り当ぬ。人の形と見えれハ明星のふすかしたれバ捻めて人ふ見ゆすつぼさしく狼に喰れるなるべし。母の詞今こそ思ひ当てられして驚きて其のくぶ窓からるが。斧ハ斧くされば捨ふひ取て我家に返えの内ぼとあけハ門引明て入る音のかりし。なかなかし母も驚て紙帳より出んとするを。そのさらに驚き給ふことなかれど。伴ふに急ぎて彼子を忘れされハ彼方に居りつる。

の絡ぶかくまで暗くなれば明るを待くこと暫くして草鞋解く焼のもとに
ようて湯あびのこと居れば母も公清力く又郎ね血つくる事れ押拭ひられを拭
臭氣のまれぬばけ　てあらくまれ洗ふよ腰骨の痛うられ爐のうとおろ
ぶ居く明るを待。こうして八幡の杜の明烏かほう鳴渡るふつれく数
多人声してたまこふ事る音を善光寺同者ゆやと思ふ行よ我門よ皆出り
てくれ出ぬうくと考めく剛低耳を聳て幽かに拍音を胸さ騒ぐて出る
ぬと起よる行こもれ。あぶだよ彼よる音を戸を微塵よ打こして乱入者ハ捕
多の裏うるべ。小多腹立小多を縛め竹箒打振て踊うて四五人の中ハ
ようこの行よう。剛低ハ脚しびれて腰よ立ぬ。亀居よ知ぬこ付ぬぶ多を挙
くるはり絡ひて。我ハ何の犯しありて斯ままハ縛ひ縛ぬぞとしかも
身打震ひれてよくもいこれを已が罪ハ已こを知りはくふと右左ひ



はる。殃も此拍音よ驚て紙帳より抜び出ぬ目脂ハ閉られく物のあ
もこ人ぞ。たぶ卯吉が泣ぬ声よ公臍を迷ひて。これ出る涙ハ拭ひて
ぬれが剛低ハ既よ高多小多にいはやられよう貉狸くるを人ぞ泣
俺る人のこれをこそいハ悲しとも思ハざくんたぶこ事ぬ
かれて。此何ぬる故ぞと問も出られど只泣ハのこ泣ハ。魅る行よ目代ハ
ようと告る者あれば捕多の者ぶも色代して逃ぬ剛低おつく面を上てこれ
が日下軍字もこれよ随ひ事る男も足ぬれる事ハ考へ放公して誰も
男ひこ。軍字も人殺の男を人ぬ事よ兼く妬こ男ひ剛低ぬりられば
かつ驚ぬ怪ひて連る男と新ぬ足合て密よ打ぬ笑こなぶ怪こ思ぬ
新ぬて剛低ぬ事る立ぬぶかり。おのれ盗人奴暗夜ハ人を殺して大臍も他こ
ぬ比と逃隠をぬる事。天道ハかく明らかなる物を思ひ知りぬるとこ云こ事。

こてハ宗叡三更村
剛化がれ
おもひよらぬ
疑ひをうけく
はるのよ春の因よ
むっとぬ
剛化

竹箆を引てはぐげ打ふうつ。姥ハ此人殺しなりといふ一言を聞うつ仏々へつて
定まり給ふ。家も亦軍字に向ひて。我子剛健の人ゝ志りうる孝行者ふ
て世間よりも国くゝ知る者と聞及れて世賞矣も有ける。然斗の奴ゝ
正き人を殺しゐるんや。我子ハ拙て人を殺さじ。名目との仙通いる人遠ひふ
ゆゝん。何ゆゑの世咎めうと驚きはゞひつるぞ。筋の世疑ひ有ふ清うゆ被れ
ゐるんを。我子をゆゑして姥を世鈑へ召連させ給へしといふをいたく叱はけて國
司の目代勤る某ぶ。元遠失遠して無罪の者を捕へべきう。此盗人ゆゑ已と志ろ
業なれが外に出へ給べきれがいひ外をるゆ及ぶひど泄ぶことの拙をもきゝぶ。
へゝねにきゝぶ勝れがいひ外をるぞ。昨夜此寂莫れすそ。何者の一出とも知
ねど伏屋の長者の殺されうとの事。足なる矢ぶうえ出ると其侵かとふ到り
て手負をしに後ゝ首を割く切殺し懐の金を奪ひ去る拙とおぶ
く。夜明ゝ血を付てこれが。血を辿る足跡かこうり家の門迄続ける
ゆゝれい。先怪しゝ七ゝ奴を捕へ召れうこれ上初血をこれ上初血をるを。あれふ
て世間人殺しふゆゝ拙とゆゝぶがふやと覗ゆる。剛健も初て我身を献ハ衣も
何も血ゆはゝれうゝ。先ゝ跡きゝる時のゝぶゝ仏付て此未明ふ所ゝの
ゝゆゆいしゝとゆひ解ゝも。何かハ外ゝん。我を歌えゝとするゝて打居る。ゆ六庭
なる本をゝり。此又ゝ血つゝゝゝ一条これゝ切殺しゝるゝゝ。
しゝん人の歌ゝえハ悪い男も取も世ゝど此斧ゝ頭打割く報答せんと立て
マゝゝゝ軍字が方を顧ゝくゝ。ゝゝ紛失ひつるかの礫衣矢をゝ広れゆ人
そゝいゝを。咬ゝ紛ひ頻ゝ目ゝ世て。これハ國の罪人ゝ私の讐討ハゝゝゝ難
ゝゝ退れハゝゝ。ゝ兵をもえゝゝゝつゝ。ゝ世ゝ眼をゝ
て机の上ゝ小判を元付て又先を九上ゝ。ゝゝ眼目市ふ出ゝゝゝのおて

我る小判。これの譲ぜて兄出を拐。軍字ゐて打返して。我も又ちうる
中ゆうへ伏五の今よ移は。斯掲焉る縄抜出る人ハ。唯そや引立よと下
知。此附夕霜ハ若太がゆうふ慶こして術ゆう寡れうつと入くんも流石よ
はゞもくて。岸戸の口ばし。現けば剛俚ハ縄分て焼も卯吉も注居る向ふ。
叱咤メうて地ゆうる人ハ。此北若太がゆうを分て腹立ゆる。軍字くれ
ハ何故くん赤ゐねど先忍くて内へも入ゆるど。抱上かれて外居ゆ。あ
附剛俚此日夕曲河の堤ゆて長者ゆ往合桂枝を賣て金を得ゆ有
の件を詳よ告く注滝ゆれども。元其ゆとおゆしても笑ひ度思ハ居ゆれ
剛俚ゆれハいとゞ赦ゆき。愈怒ゆて邦ちぶゆれ大盗人の如ハ。囚獄ゆ打
込て厳と拷ゆを拵ざれハ浮ね抜ゐ抜ゐ抜ゐ知ゆる
に何ゆハ狂豫ゆき。今ハ正体ゆ注例ゆる母の方と捺返ゆく。離ゆげ



ゆる剛俚を宙ふ引立く表よ出れば。卯吉ハ組母の脊を拝さゆて泣ゆ
居ゆしが。この体を見ゆふ堪ゆく軍字が前ふ頭をさげ。父の一日も居く
ハ祖母を苦ふ者もゐし。何とぞ父をゆして我を打も縛ゆして連引せ
ゆれしとて手を揃て拝ゐを目ゆも慈を出ゆけば。牧尻よ立く泣ゆる
をはせゆることゆふ穏鬼めゆると襟頭を捉て引戻く。ぶゆう縛ゆられ
くハ。此欠六が頭ゆて親めとおゆじざはゆしてくれんど。行くれと突倒して
同じく出ね斯ゆる際よ夕霜ハ長者の殺されゆるよしを立ゆ必定善太が
不為ゆ。えと仏付さゆふ渠も捕へられ我も憂目をやうんと忽頭上よ雷
の落かゆ仏地くれば。今此はを若太ゆ告ゆくせゆふ此所を逃去て添
遂んと思ひ定めて。ゆて大法の方よ立めぐり既よ南をして走ゆ行ゆ。

佃野山の終薪

斯くく夕霜ハ善太が[illegible]と支度して急ぎ来る人あり。
従者ふ小弓を持せ自らハ[illegible]を[illegible]袴のそばをるくかげ。菌ハ立打かぶりて
表のいろも美氣ふ[illegible]れば。然る風章中ふも若き男とぶにいへば必
[illegible]ね徒女あて目をぞめ行掠ふ[illegible]ふ十七八の少年の面の[illegible]
ふさに艶ある額髪こぼれ[illegible]涙を一目うけて涼く愁[illegible]ふ汐盃
[illegible]ふ[illegible]愛も可愛[illegible]たり。是をうろ[illegible]成て若太
が刀の上ハりとう。我刀のるくんもうも打忘れて此人の行ん方暮
く。跡目よ付て[illegible]ふもあくに立ふる而へ豆軽ども[illegible]立させ。さも仕
海[illegible]新少て軍字が出[illegible]ふ[illegible]選ふ[illegible]付て此[illegible]人ふ[illegible]合せ[illegible]ば行[illegible]
ふも好事ハあじと流石よ[illegible]付て。彼若人を[illegible]送つ。復道ふ[illegible]去ぬ。
此少年ハ[illegible]伏[illegible]の弓太郎[illegible]吐日父の長者が[illegible]の遣りれば。

[illegible]六[illegible]ふ[illegible]分して[illegible]ふ出が。千曲河の堤[illegible]正[illegible]おし[illegible]と云
者のあるよ[illegible]せかの河辺を上り下り尋[illegible]此村あ[illegible]ら[illegible]れば此
[illegible]を知[illegible]。[illegible]六ハこれを半[illegible]抜て已一人出[illegible]新て。後日にはせ[illegible]と
[illegible]へて。然と告[illegible]ら移が知るべき[illegible]もなくて。夜明るまで尋[illegible]
[illegible]立る路よ里人集り居て。然斗哀悲涼うし長者殿の[illegible]哭難さ
[illegible]達る事ハ抑前世の宿業ふ。[illegible]ハ[illegible]刀自めが慳貪の報ひ[illegible]
ひふ[illegible]ふ。不斗[illegible]耳よ[illegible]て胸の躍れ[illegible]やとて立[illegible]る人[illegible]
[illegible]て立書ふ既よ目代[illegible]の[illegible]たりとて。守人梅を実[illegible]て邊へよ
せ[illegible]名告[illegible]て近付て[illegible]れば。[illegible]る目もうとて荒筵を打[illegible]て。骸ハ血汐る
押ひしられど父をいうぞ[illegible]遠人。目も暗[illegible]も消て。其[illegible]ふとり遠り。
涙も汗も[illegible]つ人目も恥ぞ泣居るが。此人殺[illegible]ふ今捕へられ[illegible]と

て里人の近きるとゆめて騒揚て。その獣何人の捕へるかいまく絵どもうけて
鮫ふせんといひさはぎ走まりぬ。矢六それとそるるより人も犬ども尚
ざはめき叱てしかりの。多辺ようの強ふ今まで顔色もせず。何西と夜迫
歩行さへ居くふれるぞ。矢六ふ居ぶかが形いとじれ獣のあんをその庭ふ
左右ふ捕へるんや。是を切ゆさば伏屋の所分半次分取とも異論ふ
らじと誇ごこそ猛く義ひを。弓太郎ハ耳ふも鮫と軍字ふ名代て退
捕の男次謝し頓て獣の男に云うらまほしくそれも既ふ國司の囚人と
成されば。撮ふまも下し難くて拳と振りて扣へより。軍字剛俊を指さしく。
此剛俊といふ故奴がするうち私の親父を殺害して金を奪ひ盗人
ふり。さこそ云念ふれべくれど。國司の指揮を待て下ふ人の法ふ可行奴ふ
是かまもさせ難しこやはふもとも目ぞへ人とそ。引作向ふ次寄りて



俊とそれば。跡の月園糸山ふそ既ふ怪獣ふ喰れつぎうしを。近隣ふく
救ひられる大恩ふ人なりれば。思ひどなる事ふ敬ちつ。その名
を剛俊とそて。若ふ人ふ寂莫村の孝子なりと父の拙語ふ俊が親
ふ孝ある人いぞかく無腹の業とせんとかえハ疑ふつ。危角ふ公ふ事よ
と思ひ廻ふふ日外海路度の湯館ふそ此目代し矢六が額をよせく何
ど語ふひ剛俊といふ名のきく耳ふ入ふしふ今思ひ合ふれハ一条
此男の事ふそこそ有けふふ女人ふ公ふは不良者ふもれべ行成
ふをつくうふ知ぐうぐ慇成流拙をふ人ふ定めでハ撃しく讐獣
ふも恨ふ難しふ思ひ返して花豫うち。剛俊ハ弓太郎とそるうふも此人ふ
一端我を敵ぞと恨ふ勝ふも無ふ実ふのふ次郎ふ却ふ我を救ひ生を
べれ人ふと頼母敬ふ人ふれハ去ふ歌人とそれを織ふふ戻されば伸ふ

ようあて。や長者殿の太郎うこれまうの
ことと行端ゆて終ぶ。我不幸はて
世実の罪ゆ落入かく因となりぬ。宿業多と思ひ明らめて夫ハ恨
とゆも存ぜど唯和を一人ゆ引別強盗のやうに思ひ縁されゆうんが。偽ふ
恥じて痛れてこと以存ればるゆの上を見ゆ解さくゆくも此体なれば間近
ゆ難し。我亦母家ゆ在頼らくべかりとふおひして残ゆ間明よゆ疑ひ
も晴さうんゆハ国司の位ゆを中座して我ゆ親子の悲しをを故ひ残うれ
といひけく大家を捨て遊ゆ。ゆ音声自然ふゆ人の心を動ゆ世ゆ弓太郎も
様を偽し打聴ひし芝人とゆ武付軍字大腹を主く拳ゆ付て剛作面
ゆ思ゆ変ゆ思ひたちと打此目代をし盡て直ゆ国司ゆ伺へよゆハ何のゆ
言ゆいやゆやいゆゆも懲ゆ。そゆく数ゆ門ゆり責さいゆて腹ゆ居
んゆれ門主よと先ゆ進ゆ。ゆ穴を拾ゆて法ハ拾ゆ訓ゆる男とゆいれゆ人



の亡骸をも汝ゆ渡さく間取納めて弓太郎ゆ報告すべし。弓太郎ゆ
あれハ此ゆより離ゆ参ゆべしとゆひ渡して立ゆりぬ。斯て弓太郎ゆ穴を
後輿求めんとて徘徊る陽ゆ父の亡骸の足苦かゆぬゆうふとて泣ゆ
ゆ。足ゆ目別ぬ草履をゆきて在ゆればそと取ゆ見るに寂莫村の
組紐を緒ゆすゆけゆれ女草履なりゆれば密ゆ怪ゆ代日国司の帰府と
行ゆ。明白の礼ゆ得べき究竟のゆかゆとゆ早く廉ゆ引入て
正へ後輿を舁ゆれゆ。ゆれゆ抱ゆ世穴ゆ向ひて自ゆ
付せぬゆ念なれゆ目代のゆひ付なれば我ハ此銀へ参ゆ。ゆぬ。ゆ
ゆりゆゆ大刀自の驚惑ひ終ゆぬゆうふ。ゆとゆくゆひ振へてゆと頼ゆ金
ゆ。満時をさして参ゆ。ゆ穴ゆ六落ゆて何を癒ゆの称迦仏ゆ数て
経を説ゆゆとゆひけく。良ゆる男ゆる今ハ日盛ゆゆうう。ゆ迫ゆう

歩行つづけて身も困じたり。かしとふまれ酒あり。いざ給へ一つづ呑てその意ひよはつべーとの人びと其年のこと皆そこに入く。扨食酒のと果ハ帯紐解て涼こと。大ゝと豆腐あるぐするほどあ。夏の日もいつ〻夕影よなりぬ。亭うとよ驚うられこと。ふバ坊ふんとてようぼく坊〻折〻も鏡鋼鉢ること云扨打明し幡天蓋はしとる中ふ。椎を舁て墨衣着る傍ハ人〻経をよこと連く寄るあり。その先ハ六七十ばかりあく平面ハ頭短く髭ひきこる法師の九条袈裟かけるが。杖ふさがりてよろ〻るハ。坦科ちの行者の伝ゐる。近ばく〻ほ〻に欠六をさし招たく。実ふ此変事ありつるハ。そなの射て猟るれ。ふ〻こう。我ち檀越多と中ふとりても長者夜ハそのこと陣の坊の後舞はして。我と睡ばこうしく人あれば。珠文ふ人〻と借ぞ。髪剃てまゝ〻せんとて態と逢ふはありつるん。このとふ渡られよといひつ。寄ふの僧ふ

手遣ひとれハ幼ほく後裏うら明く椎ふ移さんとする況欠六おしそめそ。厚志のあとハ辱ありれど。一度伏亟ふ送り返り大刀自ふ一目暇乞せさせく明日式をとこのくてハ寺あハ送りやをべーといふ。尤俗押返して云。彫ざはゆふ浅猿を姿を尤冊ふ乞せく歎を流ふもんハ中〻ふ公ふ。はして多くの人ふ見〻れんハ戸の上ハ恥辱ふり又炎暑の耐うもあれば明日とらこと今より我ちの茶毘所仇野山ふ送りて夜半の煙と色。伏亟ふ今告ぜく彼所へ招こふ息とともに如形執行れよ曾平うの例を思へば省略るが結句ハ大刀自の意ふもかゆひて。何こと斗ひれそ足下ともうれるんどるなあり。徳のあく厚者ハ葬いよく落しと外伝の書ふ見るあ〻やこと。岩む踏ふを。そべて弁ふそひ廻せば欠六さもつれそうそ。やぐて伏亟ふ人走こせ。俄る紙烏帽子打乗こて男ふこと。顔ふ商

弓太郎
射ころを所
妖怪を
太郎
弓
猫山
金華
ハ

ゐるとを取傳ふるやく椎よ取収淺銭ゝゝて立く早去れば後追こと走り
出ることを先法師をとゞめとして偽共の迅ことを恰風の如くるれば。ようやく脚よ
いほゝて追ゐるみち。ひ方をゐ失ひれど。皆酔ゐれて怪しとも思ふべ。あと
はしく脚疾ゝ老ゝもかゐるといひつ。仇世山へと暴ひ行れ。さても弓太郎を
舘の用事繰るゆ逆しと家よ帰り。祖母刀自の前よ出く。矢六や庶と同
ば長者が教ゝ人の今を打出く。一夜庶ふねて腹を立ゝて居ゝるれば甚
いくゝ物せぐ。件りゆ尋連ゝれ。勤堂とゆゝんの傀儡が件よ居ゐるゐゝん
ゐ。今ゆも帰り来ば去ゆ勝ゝち折て國を越させ。甚の打又取障るなと門
の方と強め付て行くゆ城ゐるゝ。先涙こゞれ出く。斯ハいゐるれど父の失
給ひしを今ゆも笑せゝば。然ゐ年老ゝくゐれが。仏肝をはゞじて
病つゝや去ゝゝ。さればとて偽果べことゐも。あゝばとゆぶく有の件

を語きことゆゐゆ案の外驚ゝる氣もゆく。とゞかり伏目おて打ゝうぶと居
ゝるれが涙ひゝろこゞゝとゞて いゝゆう思ひ合されば実よさゝ幸も有ゝじ
県が山寺よ在ゝ比師の法師が此児叙難の相ありとゞひしゝが果しそゝめ
給を道れざゝゝる。但し足ハ宿業とゆゝんのゝゞゐ非ゞ。我を謀りて
多くの金銀を引出しはなた施よ遣ひ捨し。親の四討ことゐれ世よ隠徳と
いゝ物の好事ゐゝば。然ゝる死ゞ法ゝ世。されが益なておよばれごと知ゝ。世
も足よ微く往ゝて物施をことゐゐゝゐ。あのゆゝゝる奴ゝ長生しく
在ゝゐ。我家の宝数を売て失ひるんを。かゝくも早ゝ死ゝるゐ。我ゝ独
子なしたりとゝ思ゝば。唯貧乏の神迫ゆゝひゝりとゝそおりゐるれとゝひて。
つゝやく涙もこゞゞゞ。ゞ涙打ゐみくことゐもあゝね氣ゝ父るれが弓太郎ハ只
あゝれよあゝれ。ゝ示をゝと立く。父の仏間よ燈明かゞげ。魂床備けゐどく

行きぬ。小仙は彩と笑く実の親よ後生とて泣けば。残の男女ども笑續く。情あり人の別を悲しく。家の内ゆさり満く泣あひり。その五日も未刻下る比なれど。程矢六が戻らぬが歩の胸うち騒く。伯の弓箭携へ半途までなく立出る。紙家よ久しく仙利の足疾男昨日老の買求め。桐京土の殺足よ鞍垂く引出。弓を郎を打乗て。我は松明を負ひ。馬よ流く走出が。一瞬写よ一里ばかり来て向ふをこれが我男を女痛く辞ると見えて踏を十文字よ踏く来る。弓太郎それと見るより。何しか分くれ遠うしぞと馬上より聲かくふ驚て。そこはつい居く。我ホ女人さらよは酒をべくどれぞい。結るかう終酔も仕ぶび。随分よ急ぎゆへども怪しるの。路の二筋三筋ニ見えて果ぞぶびひきと。繰返しつらふ。仙利の男ホ已さを念じて。ろと人の後裏を何とて見えねぞと同ぶ。それが先往植科るの和尚のうく。

今秀葬せんとて。伏野山よ早ひひぬとらあを半ばて弓を郎。ひうる世法ホ躁と法師達ぶれべとて。我ホも告びるとしるる事なびる。我ホ赤ぶ。て得ざるぶ如し。疾その山よ走行く迎へ来ぶ。とひひさ馬を踊らそれが足疾男も喘ぶ。いくらこ時よ山の棒よ到ぶ。此所ハ往昔。聖山とうひく高野よ擬へる所よ。律院ぶども有く張ひひ。ひうる妖怪の仕ところから高く。伯どもり居つぶるも迷く。都の名の郡山伏ぶるどのやうに一向古人葬るぶと成て。ぶ深く超凄さうなれば。樵夫草苅ぶども恐く表ぶ。木暗く繁り合て。一人二人の浪りそ分入ぶん。ぶ人ぶ見ぶ。ぶるれど。父の亡骸の行衆ぶ来ぶた。超ぶ已さも何も見えぬ。ぶ火打ぶて松明灯ぶせ人新や見ゆると眼を配ぶて分ぶる所へ四五人ぶ見音てとぶ。ぶ山を迷ひ歩ぶ。ぶれば穴六を湯とて。駕よ付ぶる男ども。ぶ。痛く拭ぶ。

とうとうと。面ろこハ腐るる監のごとく成て。這く迯るを見て眼もくらくられ
おそろ太郎をもえなぞ馬の斷よりおびへて。妖物命助くといひて。ゐるのあよ
きろ伏て紙入れ。此体をみくろ太郎又てそ変事ありとて驚く。彼ホを
持てことの板間なる人間も公の紙ば。我て潰ひといひ捨て。小弓と鞭を
打て暗をも嬬ひど走登れば。果ろと苔。おぐろ坐ホ身の毛立ぐるる石
の疾ぐも山へてハ出ど。念じて力足を踏てこぐに登り。弓太郎ハ既ホ坂
紙のぐり果て墓赤と見えしに至れば。此ふる馬頭ろよ鼻を吹て物を嗅
ぎうまといよ。淫くて此方に向ホ。日ぐもあぐ暗くて。たぐ遠ある河音
の板間ふるあぐひて。ゆるハ千曲河なるぐし。ろく松明のて見れとえおろふ
るろに後日て。ホ振ある火軽もわのうるが折く氷立岩蔭ま陰れてえ
ど感ど。ホ細くて唸ろかれば。山彦の苔ある声。ひと疎ほ。それま遠て彼

処ホ走ぐれる聲まそ。死人の肉ハあぐれて味ある。美ホ味氣ある人の
臭をあり。足いろぞや我食べき者しと。男ふ人ま偏られて養ぐ
が。今霄ま我とくれまるるあり。あふ人臭やとえ活なるぐしてする
を。何ある物の好ひあやと。伏屋るる弓太郎が公の中。ろもしく愚
今ハ迯ども逃ぐと思ひれば。あろ紙結付てもかるあるえと神仏ば念
じて祈ぐる。辛じて遁付て。愛よおひつるとてど上れて松明の光ま
声ぐ一方ぐ。ふれば。僧ろ何ふ人ぐ。ふ生なるる物の。十人斗おあろで現物
を麓入るるるる眼をえんろぐし。紅井の音を呼して。指の中ろ
ろと見えし人の肉をぐひちりがひて彼等ひ居ろ。従者ハ一目見えろ
あるやと呼びてろ伏ま倒ろ。はふ。ろる松明を投捨ぐ。薪の科ま
傍ま積重る柴薪の中ホ投入れば。山風ま吹起て忽白盆のごと

ゆりぬ弓太郎も怨ーれど。こしや父のるさかふかあるねらと強てこれば
こらこらり散ーたるぬい果て父の衣どもこれば。髪も逆立こころ怒て無斗
怨ーるし。幼も失果く。聾人鬼こめふもあと。已等一人も逃をること
箭打つがして銃を合されば馬ハ勇こふいさみて躍これ此勢ひ妖物も
術ゆるや成ん。ひと逃ちこ赤を右往左往ニ奔廻て。さ洁引洁矢庭ニ射
殺こ中ふ勝ちく猛く荒かけるかあり。初こり弓太郎を目がけて頭ふ飛
かこるれどこあ馬奇代の後ニ廻れば。鐵鞭飛ちこうてこの近所ふ
こいがこ。さる樣ニ弓太郎。此荒こうれ中の頭とくれ下ふをよく怒ひて。
矢二筋ちて射ぬ。ちこねけば。牲こ物ひてこうと吼る射。山谷一度ふ
どゆれ渡るこ。結ふのけこ倒る所を。ちこうと馬ふ飛下さま太刀引
拔て起ーこを一刀こさ。これて剣の如こ瓜ふ立く。弓太郎が額髪の

毛を搔裂れと。牲ゆるさだこ。なてさ殺これば。園赤山こて元失ふ
る猫こあて。髪ひしこふ九丈まで射伏こ。こて鳥の如こ恵猫の
年経こるこく有れば。ある怨ーし今霄此馬ふ乘ふこらほこば。我ハ必
定この地ども食れぬべ。返こも此馬ハ父の猫なりと思ふ。
又源ここく。この猫こ有こ猫を。だふ人ふ知こ世こて。亡嚴の上ふ柴
打積ひて火をけ。扶従者ふ面ふ水をそこどて御ふ浴洁ふ
矢六ツ下ニ尋ここるこて。ちく逃隠て在こ。公利をせ廻て生人ふ
苦こめこ。こに鍬鍬をり提松明ども燈これ
さくめここ限ふ。梓こう地ども運びて主従者こ食こるこ。ぼくふ
語こる。此三四十年ふこう。髪ふ此猫股こて。どこもなく多くの化猫
どもの隨ひ来。山ふの三衣葬具こう葬こて。葬のこの仇ニこく里人を

ぶらし亡者ぞ元くしひるどせしこと析く〳〵有しが。忽れくるもさを直れ。今日ろハども其獻を取ること。編ま君の仕業なりと怪び合り。さの程ま埴科ちの晨潼もきこえれしい弓太郎ハ生滅滅己と唱へつ。庶撥て父の遺骨を取集め。慈と徒歩うり立ゆれハ公利吾を引里人るも後ハ添人祢名誦経とりぐ。伏面をさしてぞ送り る。後ハ此山を猫山と呼。猫岩猫の瀬などいふ名も今ふ元手遺ま殘りるとなん。

## 岐蘇路の丸木橋

扨又夕霜を其日剛低軍字の去くま合と立隔るが里人大路ま在ホて人目繁うれば。善太ぶとへ往んも中くふ怪しぬまんと再び求へ家山立廻り多てこそと入てうれば。姥を正体なく泣倒ま卯吉も欠六ま突倒されし付闘ふて胸を打息ぼ。て起も上ふぶ喘き居うれば。是をも彼を扶起て湯のませるどして姥ま同ゆ。そも某ハ何威者の狼藉ぞ。彼家内踏あらしを戸をさん打毀れぞ。盗人などの入ることや剛低反ハ合せざりしと虚知ぶ。彼ま人ハ姥否然ま人ハ有つることを注語て。我自分ハ館ま人ぶ犯しを上被さ。老とかうけ低ぶ。ぶ年ま人ぶ仕したる者ぶれが奥さ或へ入ぶ我云ゆそる俳を殺ぶ中く。即低を伴人ぶ入れまし。ゆぶふ名義因五の内ま。一夜も重てあらんぶ。と掻に説て頼ゆば。夕霜も理とうゆ。軍字ま連れ来ま面の変所ゆ。ぶて暗而ゆる分ま。て鉞へ出ん。後低ぶくぶれハ俄ふちら胸武病てらゆて伏を。姥も卯吉も誠と思ひて押へ抱へ。基方ま人ぶ公弱くま姥ハ何とゆ。ぶん去とも奥れまぶて。殺ぶ中ぶん。よも赦し後ハね幸

あるじと心強く忍び歩して行きとて怪せざる霜さも苦氣なく。我も疾く
らまほしけれど彩でかかるし難しみづから地響きちづかて明日こそまつ
やといふよ為方なくて生秋はよしと夜剛俗が上地案じ積りて同じ今
不図挫ける木の崇めやあくんと心はけ。繰よ折枝買えるる長者長も夫
故ここそさる難しも逢はれるもと思ひ今られて空器くるりて彩く紀亜
つく。姨捨山の方を伏拝そ。我子の代りに姥が命也て楽が過ぎ故終へ
とん中に大頭が立て横ふも若。眼はバタ霜を咲起して出鍬へ出ず
に卯吉も父の音信ずまやして。緒さまとは文度とれがメ霜は今さらに
逃んやうもなくて。泣ばかり。泣く鎖よりて彩と立上れへ。奥さ向へ通ば
ちく度度の門へ入り。あくいこそ。くくくくくれは甚少樵木と堀立搭
並べ立て。犯く責同ぶと揉へ為ふ。タ霜は足をこるよう心の鬼ことが

責られて。長ひさう卯吉は今や父の呵責ると悲しく。疾彩の思ひ
さまよふ父の出おりせよ。と屠正の羊代房ひ。て行居るも長ず。と
でう有て軍宇様猫よ揺生くタ霜を作向く荒時の女の新女ず
志ど既付て居るが斯いられて伏目よ感て俺新るさひの流石よ愛
やが人を和らげて。やう女兼れ昨日剛俗が一条ときけ。已いさと
塞ぐ妻ふ。定ふ。躍ふそあるよ。姥は老惚てそるとろ。外吉とゆくんも
下よ幼き奴ふれば共ふ答ふ。姥ひく疾ふれ剛俗よおくて姥何よ俺ふ
教さほ。此日ふう欲をかけて責同ぶも志ふくて落れは今又ふ。て打せ
むふ長居して候故答ふ。と叱りの。これバタ霜は鬼のうちひよ孤る心地
さそ。ふくひく卯吉をふ。ふく度の外へ主当附ふ。は。ふく剛俗ふ。と
に約合ふ。恐ふ。ふら其体をこれは頭は茨の如く一宝をも内祖せく腰

押巻さるゝに赤ゑごろを縊入ぞり絞り上て宙につるしあげる。卯吉ハ其侭見て寄て取そゞるを剛作されと見るより流す涙膽を傍ひ咽の縄目が浸して口へも食入ければ頓に物も云得ず縄を左右も衰りて退退んどもせざれば剛作ハそこに立止り涙を呑込しまゝなる卯吉が同ぢ母人ハ何にかゝる夜さり今朝の間もお甦ハよく気りゝる呼心細くおハすらんにあど唯一人熟して打連くハ来つるぞ昨日弓太郎といふ少年の尋おろし侍らんが其つぎ告んとてや来つると、いふに夕霜又胸を踊らせて何故に彼人のゆきを尋す間らんと不審に聞し一番で傳よりいやさ其の人ハ今日も我かの人ハおかさん夢に見そるても今れを守にあゞ問給ふ夕剛作ハくやしさり天を仰ぎて大息をつき今ハかくそとつぶやきて夕霜に向ひ、洪弓太郎といふ人こそ我妻実の罪を察し救ひくれたる人とおもふて。

悪しく頼みし置しが。今まで音信だにとかくハ我を欺と疑ひ恨みおかるゝあらめさハ又かゝる誰ありて我を救出しくれんおんもん我因果の内にすくなからねも。左活許よく母人を孝養しろ件を憐ぞくれよ。卯吉も夕霜を母と思ひ親しくて諸小祖母を助傳さ。我死たりと思ふも努母人に知らすまでなれ。昨日より数度の謗に肉裂骨碎されハとても活べしと覚えねバ今達こそ限りなるぞ。歎すくさせよとて卯吉が押固て泣居る袖を及びつゝ嗤へて引放ち、ともに残る落たる紅を撚付く注がたり。然る程に縄取共が附剣勢ひ引立引父が後にを見送れバ卯吉ハ撥に打れたりと見えたり。務中ハ紅井の練を水にねじたせたる母らふに悲しく、となりて有るを見るに卯吉兄も恐れて其所に泣倒退を夕霜もるゝ故におどしすかして。獄の外へ伴ひ出ばぞ卯吉が腕を絞めて家にかへり娘おハさとよく言はれば。獄の中なる打悦ぶく。遠からぬ間に救て

継母於素
知吉

ぶくろくのかみ

ゆゑ、拙ごと日をかぎりて待居る。又夕暮は若太子は迎れて伺達しに
衣さし櫛のごの欲うりれば。まづく爰こゝ来るく長者と謀ふるに就く。
呉ひうけも剛俊が詐偽と思ふ。焼き人殺まを知うけぬることいふん方なく心苦
しく。うつゝ善きが仏の怖畏行をもこそ知りて可愛の情も醒れば。長者は
教ふる剛俊よあぶ若太子もやこらひ生まれど。安定ともこれこゝを
中くわ玉敷て若太を捕へ殺せが一条我ロよう洩と知りて。その伝え我と同数
の手ひいひなるらんや。其府何と陸ぐれ。我は世代目代ふ人憎まれ居れば。
敵のまを見も新毋げなと疑くて。ちぐ呉ひ廻ふ。兎角こはけて我仏の
あらしさうの悪者ともちぶ拙ひ初し偽さの今は取返しがく懲た
懲く。此後男とふ拙ふる目うてこれも平ぶと安呉ひうしが。此度のゆ焼
や行きくもに我も登れ色と先しう。少し身の甘ぐ平ふ呉へく日代移る

体ふ又懲ぞもうふ弓太郎ふる母紙男ひ生し身代もぐ母ふ強しく床し
くれは。此比剛俊がいひしことば代よりとおとひうて夫まかとはけく伏急へ
行き。そのくは生く敷ふうもこそやと思ひて。焼ふ糸のくうゆて剛俊
の使言のひよ紙と夫へく。世間憚らび髪化粧し衣装えてかりこまゆきて。
弓太郎ふ間近くて拙ゆへんといひ入れど。弓太郎はこの行仇野山ふく
猫股ふ撞彼くれ死瘡の。其の折へさまざゆも呉へざりしが次第ふ痛こ
生く面を落蹠の弄の母うふ忍しく腫あぐう。身うち焼がごとく苦く
て。拙も呉へざ悩こ伏居る附ふれば。声ざふきうび夕霜は本意遂ひ
く往くふ行ゆりふ去りゆ。弓太郎ふ病はうざは。とくゆも白焼ふ達てゆ
のさ母を問わさくゆ剛俊を赦ひ出して不仗の死をばせさひ写姿とて
もかくても難脱宿報ふこそと哀なれ。是を拙歪かの若太は剛俊が家

ハハそをうれ隙として急も面高く出入し。夕霜なバ一向妻のおとく領
さえ外吉をさへ我者のやうよ追使ひて悼る氣もなれを。秋風しるし初し
夕霜がこゝ洗ふそ惜しも疎はしくもそえて有しやうもあひしらの紅ぞ。
善吉怪しそ此女がこの頃髪化粧して出あるくと告る者の有しへ我
亦そ又こと方ふ密夫をこしらくるるべし。夜つ又孤して辛めそせんと
伺ひるよ。又月代の軍字ハ此ゝど夕霜が悔るれをこしより姫ふ
も高ぶく。再び慕へしくさへ成れば。滝金松の女文字ふ多こまぐと出
て。吉太そ不良者ふてやがて因とするべなれば早う退離ぶく我ふ踏へ
し。然ふ夫の子のこゝ姥がこゝふもよそれ事あるといひ事ゝそれを流石ふ
昔しなるらしく打もおうび讀居ふ所へ善をつと入来りて怪ふるよう
花ふるとく。數書ハ森ふんとすふ夕霜ふ驚きて懷ふ引入れを裂ふ

ふりて仰向ひさ倒し。腕ふ入れをくしこ。ゝ詐声を荒らけく。已
やどの者の眼ハ抜て密事をれ。拉女賣女ふも出りくれ徒ふ者ハ懲
ちめいかくまれぞとく。性髪ハふりて引きくうち撃べ。女そまを拉て
これいさるいとけ。ふ多ふあいあらば。ハ鉞の古峯傍のとより。拘治ふこ
借よおこせ。れ有りと。倦れどいそ。の救さん女を傍ふ突離して多を繰
返しけ。れど。元来いろはのい文字もゝるうび漢ざりれべ。白凝ゞま
ち頭がさをして少し義勢も失るやどこれ。外吉ゞ已歌ふとれけ。くうび
うけてこれ一ハふそれ性せよ。賃ふ入ふ券戸の桃ふもあれ他の畑の瓦ふ
もあれ。ゝれ拘ふ。せんと遊従して。いざくとさしけく。卯吉ハ祖母の傍ふ下
屋ふ在るが。吉太が罵る聲のしければ。何ふとて立出居れ成よび
けけこかく漬とせられぬ。いぶハせんと継母の夕霜ゞ方をとれ。

色と失ひて今や漬立ると肝ころも身も溶ぬ体なれば。痛はしくて
樵蘇をりしう。元来かゝこれ者なれば。さと出ようて只尋常乃消
息久のやうに讃なくて伸せられば。善太ぐわらげ幼きも幼者のよも
虚讃さへしおりねば。さも女と生て早まりてあしう打嘲ろうと
壓口して居るがいぢらく紡朱の賃すて来さとせんとらをを居よ。
はと立ようなりければ。夕霜飾りの嬢しさにその侵外吉次に奢て。扨も
かゝらるせれ者なと脊中成接拵えぐう。
信濃なる木曽路ふかくる九木ばし。ちらし附ハあ五りしと
とロどもみられば卯点多を巻収めて。
志なのなるものはらあしもやどらふねどころ毋ぐどもふだうも
とこゝんてさし出を成夕霜ハまを取けくも流石なる恥しくて下面の方

へ志こう入れ此女折ふ觸くれかゝれ優き一節をもよこ出るどして一向
の夷名ふもあらぬ程ど。生得の仇しさふ。ふ良者生れ祥されく自然ふ
名もしくはくくり。終よ才をちぶらして。性しれ死成さんとげれる後
そのるみとちうんバかんをぐ女として。性ひべきハ此美情なれ行ひて
こそ有れ。

丸木橋のくくのてれ沙石果ろ出ぐう
くくれ無をかりて迎向しるなく兼

月冐鄙物語巻三　畢

東京帝国大学 鄙物語屋